氏　　名　田中毎実（たなかつねみ）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　論教博第 101 号
学位授与の日付　平成15年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　臨床的人間形成論の構築――大学教育の実践的認識を手がかりにして――

論文調査委員　（主査）教授 皇　紀夫　教授 矢野智司　教授 山﨑高哉

## 論文内容の要旨

本論文の目標は，その序章の冒頭部で，教育理論の臨床的人間形成論への再構築にあり，その研究戦略として大学教育の臨床的研究を活用する，と明記され論述もその筋で展開されている。論の構成を大きく区切るとすれば，第1，2章では，大学での教育学講義をフィールドにした実践的な人間形成論の研究，第3，4章では，最近の教育学研究の学理領域のなかで特に人間形成論の系譜において未解決な理論的課題の探索，そして第5章では，前述の実践と理論を統合した新しい教育学研究分野として臨床的人間形成論が提起されている。このように，理論と実践を相互に媒介させて教育学における新しい理論的研究の可能性を開示するという戦略をとっている。

第一の大学教育のフィールド研究は，論者自身の大学での授業を教育学研究の事例的テクストに見立て，教育言説における自己関与性を確保することによってはじめてもたらされる教える者の主体的実践的な反省知において，形成論的文脈を探る臨床的研究であって，さまざまなプロジェクトの取り組みを通して，教える人間の自己認識と自己形成（教育的公共性）の過程が確かめられている。特徴的な論点として注目されるのは，大学におけるFDの課題を単なる教員個人の自己認識の問題にとどめず，教育的公共性の担い手としての教育者集団の支援として焦点化し，実践研究のネットワーク化を志向しているところにあると言えるだろう。一連の公開研究授業を通して得られたFDに関する知見は，それが一方的な啓蒙活動ではなく双方向的な相互研修の場面であって，実践者同士の「物語の交錯」が出現する協働現場という性格をもつ限りにおいて生産的であるとする見解である。教育活動における相互性を強調する立場は，さらに理論化され，状況に内属しつつ所与の教育現実と対決して自らを洗練していく「生成の理論」に媒介されて，効率的なシステム化を志向する大学教育論と対決する論点を生み出していくのである。この主題に係わる研究としては，人間形成論の実践的局面を探索するという本論の意図に即した解釈においてもとより生産的であるが，より一般的に大学教育の研究方法論に対してもさまざまな問題を提起しており，この事例研究の記録や関係資料などは貴重なものである。

第二の人間形成論の系譜をたどることで探求される理論的課題は，ドイツの教育人間学に起源する人間学的な研究のひとつの到達点として森昭の人間形成原論を位置付け，その森が求め続けて果たし得なかった統合論と原理論の人間学的構築というテーマを，学的遺産として引き継ぎ，彼の原理論への偏りを修正して人間形成論を批判的に再構築するため，現在の教育研究の革新に必要な新しい概念装置として，臨床性，実践性，自己関与性，自省性，理論的統合性を設定し，新しいタイプの人間形成論（臨床的人間形成論）の構築を企図した。先の大学教育研究はこの人間形成論を構想する実践場面に当てられ，理論と実践が相互に交差する意味生成の契機がそこで演出されたのである。

研究を展開させるこの論点はさらに，エリクソンや森昭によるライフサイクル論と異世代間の相互性といったより包括的な概念によって補強され，日常の教育を存在論的な文脈において改めて意味付ける視界を開くのである。

第三は，臨床的人間形成論の知見として産出される教える人間の自己認識がもたらす自己形成の様態として教育的公共性を新たに提示し，この教育的公共性において，教育における理論と実践の新しい関係，開放的な連携と呼ばれる相互生成の関係が可能であって，大学教育の共同研究で明らかにされた相互性の原理にすでにその端緒を発見できると指摘されている。

本論文は，一貫して人間形成論の批判的な再構築を目指しており，大学教育の極めて具体的事象に言及する場合でも，一方で原理論への偏向を厳しく自己規制しながら他方で単なる個別事例の説明言説に回収される危険に強い関心を払って，個別と一般の微妙な境界を縫うように論が進められ，その思考法を映して，論述自体もまた独特なスタイルを作り挙げている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文において学理論として提唱される臨床的人間形成論とは，教育哲学研究の系譜で見れば，教育人間学，人間形成原論，人間形成論に連なる研究であり，その論点の特徴は森昭によって提示され未完に終わった「人間形成原論」の構想を，今日の教育研究の主題に引き寄せ新しい文脈において再構築した所にある。今日の教育研究に要請されている人間学的あるいは教育学的な概念として，本論文では，臨床性，実践性，自己関与性，自省性，理論的統合性などが挙げられ，これらによって人間形成論に新しい地平を開こうと試みたのである。その構想自体は必ずしも鮮烈である訳でなく，基本的に森昭のそれを批判的に継承して，存在論と形成論の交互的循環の動的平衡において「人間」世界を想定する立場であると言える。この種の構想はしかし，森の場合を含め従来の教育学研究にあっては抽象度の高い思弁の所産に止まったものであったが，論者は本論において，従来の構想がもつ「原論」的に傾斜するという弱点を批判しそれを克服するために理論と実践の両面から密度の高い思索と実験と共同の議論を重ね，先に挙げた臨床性以下の諸概念を開発活用して人間形成論の語り直しに挑戦した。本論の学術的価値は，伝統的な人間形成論に差異を仕掛け教育言説に新しい文脈を作り出すという，教育学研究の根本課題に正面から，しかもすぐれて今日的な概念装備を整えて果敢に挑戦している点にあるといえる。哲学的な論の展開を自在にこなす柔軟な思考と教育学や人間学に関する豊かな知見とが論述の展開を説得力ある，ある種の迫力を感じさせる，高水準の論文に仕上げている。

論者はこの挑戦を達成するために，研究のフィールドを大学教育に設定した。人間形成論を具体的な教育活動の場面と結びつけ，しかも，その場面が教育と人間形成を主題とした自分の授業であるという二重の条件設定によって，教育研究者として研究主題に自己関与する立場を方法論的に施設した。その仕組みは人間形成論に臨床的あるいは自省的意味付けを確保しようとしたもので，本論が展開する大学教育論を人間形成論的性格の理論として際立たせる要因になっている。つまり，その大学教育論では，授業の方法や内容の改善や意義づけを中心目的とするのではなく，また従来の，教えられる者に依拠して教育を語る立場ではなく，逆に教育する者が教育活動において自己変容する場面や過程を教育の意味発見の事例に見立てる立場である。この実践的な立場の設定の仕方は大学教育研究にあっては希少であり，こうした主体的な教育研究のスタイルをとった人間形成論の展開はその例を見ない。研究者と学生に向かって教育論のテクストとして自ら立ち，そこでの論議を潜らせて再び改めて教育を語る，こうした息詰まるような場面を繰り返しながら，論者は他方でこの試みの理論化に取り組んだ。その到達地点において当面の人間学的実践主題としてカテゴライズされたのが，「教える人間の自己認識」と「教える人間の自己形成（教育的公共性の構成）」である。これらはさらに，エリクソンや森から継承したライフサイクル論と異世代間の相互性論によってさらに人間学的意味付けが施され，日常の教育の営みと意味が人間のライフサイクルの全体と異世代間の相互性という文脈において起動するものであることを開明してみせた。

人間形成論の理論的展開を新しい文脈において遂行するために，理論と実践の相互互入の仕掛けとして大学教育を使うという発想は大胆にしてユニークで，しかもそれが教師体験論に回収されることなく，この仕掛けによって逆に人間形成論に理論的な多様性，なかでも相互性論に力を与え，論の独自性を際立たせることに貢献していると言える。理論と実践の対応関係の構築は，教育学研究の古くて新しい課題であるが，本論の試みは臨床的人間形成論のみならず，ひろく大学教育論や教育実践論などに向かっても，貴重な論点や方法を呈示したものと評価できるだろう。ただ，大学教育の個別の事例的研究に関していえば，分析や記述の方法などが二項対立的な手法によっている場合が散見され，他の主題で展開される鋭い論点に比べてやや平板的であるとの印象を与え，もう少し工夫が期待されるところである。また，論調への全体的な印象を言えば，文体は強い説得力をもっているが，部分的にやや晦渋のきらいは否めなかった。

論者は早くから，既成の人間学や教育学に対して厳しい批判を展開してきた論客のひとりであるが，本論文はそれらの批判的論点を自省的に展開してみせたものであり，批判的な再構築というきわどい迂回路を経由して構想された教育論の貴重な成果であると言える。この意味において，本論文は今日の教育学研究の先端に位置するもので，構想を展開する手法の独

自性，新しい概念装備の工夫，理論構築の斬新さなどいずれの点においても優れた学術的価値と先進性をもっていると評価することができる。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成14年11月25日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。